

現地ルポ

開拓十八年にして

酪農北海道一組合の栄冠を かち得た門別町富川平松開拓を訪ねて

松 原 守

飼料栽培と利用状況を中心に

—根菜類は一頭当
五口を目標に—

一はじめに

昭和三十五年より北海道乳牛經濟検定組合連合会と北海道新聞社が共催で酪農北海道の農家群を選定しております。昭和三十九年度、第五回に日高支庁管内門別町富川の平松開拓乳検が見事酪農北海道一組合に選ばれ栄冠をかち得ましたので、ここに飼料栽培と利用状況を中心にご紹介致します。

二 開拓十八年の足どり

平松開拓の人達が富川に入植したのは、昭和二十二年、當時、八雲町より満州開拓団として渡満して、あの広い満州の地に一大酪農郷を自分達の手で作り上げよう夢みて出かけたのでありますが終戦のため本道帰還を余儀なくして、その実現できなかつた夢を他に求め、當時未開の瘠薄地だつた

た現在の地に入植したのでした。当時、この地は王子製紙が所有し、大きな木は伐採されておりましたが、それらの根株、あるいは小木が生い茂り、野地坊主が立ち並び地力は劣悪を極める有様でした。そのような状態の土地と取組んで開墾はしたもの、燕麦を作れば一俵、馬鈴薯を作れば八俵、小豆では二斗しか獲れず、一年汗水流しても、手間賃にもなりませんでした。このような状態ではとうとてい農業を続けて行くことは不可能なことでなんとか早く土地改良を行ない地力を上げていかなくては組んで来ました。全開墾可能地を開墾し終えたのは一、二年前であつたそうです。このようにして、最初、与えられた土地（平均一五・七町歩）と聞つて来ました。

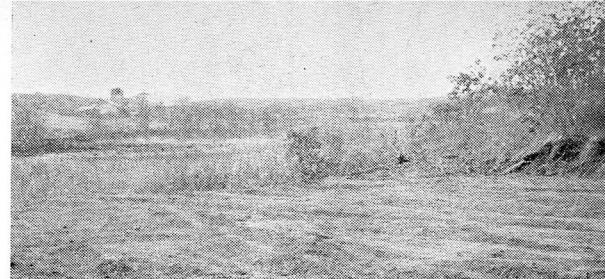
三 土壌改良と多頭化、そして乳検が北海道一への足がかりに

昭和二十九年日高地区は高度集約酪農地区の指定を受け国は貸付け牛としてジャージーが導入されました。このころから赤字

続きたった経営もぼつぼつ黒字に変ってきました。多頭数飼育により生産量が多くなりばかりでなく、過度の労働力と生活を犠牲にして行なった土地改良の成果がこのころになってようやく始め、生産力も年々増加して来ました。又、同時に将来に対する望みも出てきましたのでそれだけに、いつそう努力を重ねました。反面頭数が増加しても施設が間に合わなくなつて来ました。又、子供達が大きくなるにつれて生活に要する費用も増加し、新しい悩みができてきました。これらの解決策としては長期の政府資金の他に短期を他に求めましたので負債の額も一〇万円に達してしまいました。だが平松の人達は過去の苦しい体験の中に負債を償還した経験を有しております。しかし、反転客土を行なうことによりそれらの問題も解決でき、肥効も目に見えて良くなり、生産力もぐんぐん上つて参りました。改良前に比べると、倍近くの增收をみております。これらの事柄が合わせて、非常に苦労は伴つたが今回、酪農北海道一に選ばれるような酪農地た。しかしこのよう向上してきた経営内容も年とともに個人差が出始めました。そして遂には、長い間汗水流して開墾し、土地改良を行なつた農地を離れてしまふ者さえ出始めました。

だがこのような平松の人達を力づけ励ましたのは昭和三十年に成立させた乳検であります。代表者都築貞夫さんを中心には皆が力を合せて研究してきました。乳検の方法は省力的なデンマーク式を採用しており、組合員は月に一度、集会を持ち、過去の成果を知らせ合い、検討し、新しくおこつくる諸問題に対処しております。時には改良普及員をもまじえて意見を聞くこともあります。

昭和三十六年より始められ四〇年完了を目指して行なわれておりますところの反転客土はこの平松開拓の酪農を安定させた大きな要因となっております。この地帯は表土の下に二〇~二五秀溢の火山砂の層があり、その下に旧表土があります。植物の根はこの火山砂の層では良く伸びることはできません。そのため作物の収量に大きく影響しております。しかしながら、反転客土を行なうことによりそれらの問題も解決でき、肥効も目に見えて良くなり、生産力もぐんぐん上つて参りました。改良前に比べると、倍近くの增收をみております。これらの事柄が合わせて、非常に苦労は伴つたが今回、酪農北海道一に選ばれるような酪農地帶となつた大きな要因であります。最近の収支の状態、並びに資産等をある農家についてみると第一表、第二表のとおりで開拓地としては粗収入は表面上、高いように見えますが、これに要する農業支出は一般的の農家に比べてかなり多くなっております。



平松の土層、中央の白い部分が火山砂の層であり、その下に旧表土がある

四 飼農北海道一の飼料作りと給与の実態

II 多汁質飼料を主体にした飼料構造で収益性の高い酪農を

(一) 飼料の給与

—飼料自給度八〇%以上—

飼料の給与実態をみると成牛一頭当たりは次の第三表に示すところである。これは昭和三八年の実績であります。

自給率はFuで八二・八%、D·T·Pで六七・四%でありその他は購入飼料に依存してい

る。

第三表 成牛1頭当年間飼料給与量

飼 料 名	給 与 量
根 サ イ レ ジ	kg 1.070
菜 菜	5.460
類 草	2.690
乾 青 放 濡	0.920
厚 剥 繫 飼 料	6.910
合 計	6.680
Fu 自 給 率	3.870
DTP 自 給 率	82.8%
購入飼料費(円)	0.380
	67.4%
	24,000

飼料構成をみると夏は放牧、青刈を中心としており、冬も十分とはいえないが根菜を取り入れるなどして産乳量の多い多汁質飼料を多く取り入れられております。これは乳検組合員一戸の平均であります。ある人は冬期間に三五位の根菜を与えており、日量にして約五キロから、一五キロ位の量を成牛一頭当たり給与している計算となります。頭数の多いの中には労力的に根菜を多く使用したいのであるが小量しか作れ

ます。根菜類では家畜ビートであるが換金

ます。

(上野幌育種場)

第二表 損 益 計 算 書

損失の要部	金額	利益の要部	金額
摘要		摘要	
牛	1,092,281	牛	1,473,756
費	9,924	収益	24,500
費	35,946	益	103,970
費	42,580	益	82,052
費	31,702	益	22,450
費	42,960	益	40,000
費	23,997	益	223,860
費	27,750	益	30,000
費	1,357,140	益	2,000,588
費	44,850	益	35,400
費	35,505	益	33,462
費	80,355	益	68,862
費	26,140		
費	64,428		
費	90,568		
費	460,640		
費	80,747		
費	2,069,450	合 計	2,069,450

第一表 貸借対照表

摘要	金額(円)	摘要	金額(円)
預金	17,300	未償本	394,258
未食肥	2,000	貸付	1,404,335
飼料	125,000	経常利	0
資本	391,940	益	1,798,593
資本	7,100	年利	1,443,233
資本	333,837	負	80,747
資本	889,660		
資本		合計	3,322,573
資本		合計	3,322,573

ずにいる人がおりますがこれらの人達も将来、もし、労力的に都合がつけば冬期間にもう少し多汁質飼料の給与を増すためにも根菜類の作付けを増したいとのことであります。

(二) 飼料栽培について

—将来の目標は一頭当牧草三反、サイレージ用デンント一五反、根菜〇・五反—

飼料の栽培については、現在の所有面積が二〇町前後になっており、そのうち実際に耕作しているものは一五町前後であります。一頭当作付面積は成牛換算で牧草六・四反、デンントコーン一・七二反、根菜〇・二六、青刈類〇・三三反で合計八・七二反で一頭を飼育しておりますが土地の生産力が上がるにつれて一頭当の面積を少なくしていくべき頭数を増加していくことが可能になります。将来の目標である農家にきいてみますと、一頭当飼料栽培面積は五反位、内訳は牧草三反、サイレージ(主としてデンントコーン)用一・五反、根菜類〇・五反であるとして牧草の生産量を上げ、面積を少なくして済むようになります。根菜類については現在土地改良もまだ中途であり、牧草類の生産力も低く、労働力を多分に要するので、比較的労力の必要とする根菜類には手がまわらないために、作付けも小面積となつておらず、手間の都合がつき次第に根菜類を十分に作りたい様子である。使用されている牧草の草種はチモシー、オーチャード、ケンタッキーフィエスク、メドーフエスク、赤クロバ、ラデノクロバが使われております。根菜類では家畜ビートであるが換金

五 今後の目標

当面の目標としては搾乳牛二〇~三〇

頭、耕地は二〇~二五町歩、粗収入は二五〇~三〇〇万円、農業所得は一〇〇~一二〇万円の経営規模でデンマークの中農位を目指しております。本年度には反転客土も完成致しますし、農業経営の拡大に伴い大農具等も導入し、いまあるものに合せて、フルに活用し省力化に努め、過去の専門経験をもとに目標に向っております。春の農耕期を前にして、あちこちでサイロや牛舎の新築、増築が行なわれており、夏の間、活躍した農機具類が念入りに手入れされております。

用としての砂糖ビートを作っている人もおりこれらのトップも有効に利用されています。飼料作物を栽培するにあたって一ぱん手間を要するのは土地が比較的湿地であるために雑草が多いことである。また瘠薄地だったので堆肥の施用、石灰施用も必要となります。

だつたので堆肥の施用、石灰施用も必要とし、反転客土に平行して行なっております。

日高地方は冬期間雪が少ないため土壠凍結がひどく、そのために春先の耕耘がかなり遅れます。牧草の冬枯れがおきたり、またデンントコーン等は生育期間が短縮されるために十分に実が入らないために栄養価の低いものになってしまいますので、牧草の追播、デンントコーンの品種の選定、このような害に対する割に影響の少ない根菜類の使用が今後この地帯で考えていかなくてはならない事柄であるようです。